

沼野さんとの約半世紀

平野 共余子

沼野充義さんとの出会いは1975年、駒場の教養学部の吉上昭三先生のポーランド語の授業であった。私は比較文学比較文化の大学院生であったが、沼野さんはロシア科の学部生で、恰幅のよい現在の沼野さんからは想像も出来ないほどの中肉中背であった。若さに似合わない威厳があり、既にロシア語堪能であったため、同じスラブ語族のポーランド語も難なく習得してしまっていた。

私が出席していた蓮實重彦先生の映像論ゼミで、翌年同人誌を作ることになったので、文学の同人誌活動をしていて映画にも興味のある沼野さんをお誘いして、我々の同人誌にも参加して頂いた。手書きの原稿を青焼きコピーして作った雑誌は、ホチキスで留められない厚さとなったので二部に分けて、オレンジ色のやや厚い紙で作られた表紙と裏表紙は沼野さんがデザインした。沼野さんは表紙と裏表紙デザインの参加のみで、この時に原稿は寄せていない。

『閨祭 1』と題されたこの手作り同人誌は1976年9月発行で「定価150円」とあるが、周囲の友人たち以外に誰が買ったのだろうか。表紙はとぼけた蓑虫のような生物が、裏にはフクロウが次第に人間の顔となるいかにもSF風の額縁に入った絵が描かれている。いずれも沼野さんの特質を表現されているように思える。

1976年秋から私は旧ユーゴスラヴィアのベオグラード大学大学院に留学して、1977年初夏に帰国。創刊号しか出なかった『閨祭』がその秋『シネマグラ』という雑誌に発展し、数年続いた。今回は七月堂という当時梅ヶ丘にあった印刷所を確か沼野さんに紹介して頂き、同人でお金を出し合ってより本格的な雑誌となった。その創刊号に沼野さんは「道吉昭治」というペンネームで「極私的ソラリス — 記憶の海に雨が降る」というエッセイを寄せている。沼野さんの文学的素質は当時から際立ち、学問に対しては超優秀ながらソフトで謙虚なお人柄で、「ヌマちゃん」と皆から親しまれていた。

1979年、フルブライト奨学金でニューヨーク大学の映画研究学科に留学した私の2年後に、沼野さんは同じフルブライト・プログラムでハーヴァード大学に来て、休暇にはマンハッタンの拙宅を足場に、ウクライナ系の住民の集まるイースト・ヴィレッジなどに通っていた。語学の天才である沼野さんは私よりずっと英語も素晴らしくて、その溢れ出る知識と教養で周囲を圧倒していたが、気さくな性格なので私の友人たちとも親しく交わってくださっていた。Mitsuyoshiは何とも発音し難いと当時の私のアメリカ人の夫は、

アメリカでも通用する Mitch という愛称を進呈した。

沼野さんのお兄様のお一人がやはりフルブライト留学をされていて、兄弟でフルブライト留学生というのは話題になっていたが、日本のフルブライトの関係者がハーヴァード大学を訪問した時に、留学2年目で大学の助手を務めていた沼野さんの優秀さが賞賛されていたとその方から伺い、私も沼野さんの友人であることが誇らしかったことを思い出す。

沼野さんの多岐に及ぶ才能は到底狭い教条主義制度に収まるものではなかったが、本郷に現代文芸論研究室を開設され、そこでは世界各国から集う学生たちが自由に伸び伸びと学問に勤しんで来た。沼野さんの研究室に伺った時のその雰囲気を出して、私のニューヨーク大学大学院の同級生でリオデジャネイロの大学で映画学を講じるジョアン・ルイス・ヴィエイラが来日した時には、沼野さんをお願いしてヴィエイラ教授の講演を現代文芸論研究室で開催して頂いた。その時に沼野さんの希有な才能を新たに発見した。準備期間が短かったのに関わらず、沼野さんは数十人の参加者を確保してしまったのだ。あっという間にコンピューターでチラシを自ら作ってしまったのには、『閨祭』の表紙と裏表紙のデザインを手がけたグラフィック・デザイナーとしての才覚を思い出したが、東京外国語大学のポルトガル語科にも呼びかけての人集めの巧みに、通常の研究者には見られない実務者としての行動力を見せつけられたのである。講演後の懇親会でヴィエイラ教授は、大黒様のような慈愛と包容力に満ちた沼野さんの笑顔の優しさに感嘆していた。

2010年に私は旧ユーゴの関係者たちと東京で、旧ユーゴ地区の映画をDVD上映する「シネマ・(ポスト)・ユーゴ」という企画を始めた。当初は東大駒場キャンパスや筑波大学茗荷谷キャンパスで開催していたが、2014年より東大本郷キャンパスで沼野さんや現代文芸論研究室、スラヴ語スラヴ文学研究室の皆さんのお世話になりながら、共催して頂いて来ている。上映に関しても常に幅広い歴史と文化についての知識を基に映画を位置付け、映画を支援して下さる沼野さんのような学者は貴重で、沼野さんは映画に関わる我々にとって大きな味方であった。

沼野さんのますます幅広くなりそうな今後のご活躍に、そして沼野さんの業績や意思を受け継いで下さる若い世代の方々にも期待したい。